

令和 6 年 5 月 7 日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00100

研究課題名（和文）『葉隠』の武士道における忠誠の再検討 「誠実」をめぐる日本倫理思想史学的研究

研究課題名（英文）Reconsideration of the Loyalty in "Hagakure": as the Problem of Faithfulness in Japanese Ethical Thoughts

研究代表者

栗原 剛 (KURIHARA, Go)

山口大学・人文学部・准教授

研究者番号：50422358

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近世日本の代表的武士道書『葉隠』における「忠誠」の倫理が、主君や国家のためにいつでも迷いなく死することの要請であったと同時に、生きて自らの職責を全うすることの要請でもあったことの意味を、問うたものである。結果、そこにある矛盾の深さが再認識されたとともに、この矛盾が、儒学など同時代の日本思想においても求められた、かけがえない他者および自己に対する「誠実」とは何かという、より普遍的な問題の解きがたさに通じていることも見通された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『葉隠』の説く武士道については、その没我的忠誠が背後に有する矛盾や意味を、すでに多くの先行研究が指摘してきた。本研究の成果はこうした知見の蓄積に連なるものだが、この問題を凝縮する局面として、最終的には主君への「諫言」に着目したことにより、「忠誠」の具体的な機微に即しつつその倫理的本質に迫ろうとし得た点で、新たな意義を有している。これを今後、「誠実」とは何かという視点から、同時代の諸思想に対する分析としても開いていくことが出来れば、ひいてはより広く日本社会にとっての倫理を模索する営みにも、資するものと期待される。

研究成果の概要（英文）：This research aimed to reveal the ethics of loyalty in "Hagakure" which requested the retainers to die anytime without getting lost and at the same time to fulfill the duties alive for their lord and country. As the result, a critical contradiction is recognized between death and life in "Hagakure", but this contradiction is probably to be found also in the requests by other Japanese ethical thoughts such as Confucianism, as the universal difficulty of faithfulness for irreplaceable others and for one's own self.

研究分野：人文学

キーワード：葉隠 誠実

1. 研究開始当初の背景

(1) 国内外を問わず、日本の武士道に対する関心は高い。しかし明治以降、武士という存在は名実ともに消滅し、その精神だけが、時代の要請に応じてプラスにもマイナスにも脚色されてきた。結果として、現代における「武士道」イメージは多種多様である。伝統思想としての武士道を今に活かしていくためにも、まずは、武士自身の言葉とそれが発せられた時代に即して、彼らの思想を理解する(「武士道を武士に返す」菅野覚明『武士道の逆襲』2004)姿勢が、いっそう求められている。しかし、この要請に応えることは決してたやすくはない。

(2) 18世紀初頭に著された『葉隠』は、近世日本における代表的な武士道書として、長く注目されてきた。「武士道と云は死ぬことと見つけたり」という一節は、一般にもよく知られている。何より主君のための「死」に対する要請の激しさから、それは多くの論者によって、共感的にも批判的にも、評価されてきた。

しかしこの『葉隠』についても、いまだその背景にある思想の全容が、当時の武士たちの言葉に即して、十分に解明されたとは言えない。したがってまた、客観的な思想史的位置づけが確定されるにも、至っていないのである。本研究を開始した時点(申請書類を執筆した時点)において、『葉隠』本文に即した分析については小池喜明『葉隠』(1999)、研究史の分析については種村完司『『葉隠』の研究』(2018)を、比較的新しく代表的な先行研究として挙げた。しかしこれらも、定説として認知されている、とまでは言えない状況である。

(3) こうしたなかであって、まずは『葉隠』の本文全体を、研究者を含めたより広い読者に対して開かれたものとする必要がある、という問題意識から、本研究開始前の数年にわたり、『新校訂全訳注 葉隠(上・中・下)』(講談社)および『底本 葉隠〔全訳注〕(上・中・下)』(筑摩書房)が、相次いで出版された。両者は、今後『葉隠』の思想内容に対する研究が深められていくための、新たな足がかりである。とくに前者は、応募者がすでに科研費の助成を受けた研究課題の成果でもあり、『葉隠』に対する倫理思想史的位置づけを目指す本研究にとっては、直接の前提となっている。地元の佐賀県立図書館に保管された写本の翻刻、さらには語注・人物注・現代語訳の作成、といった基礎的な作業のうえに、本研究は立脚したものである。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、『葉隠』が説く主君への 忠誠 を直接の手がかりとして、近世日本における武士の倫理思想がもつ特質を問い直すことを、目的としたものである。

広く近世の武士道については、そこに「士道」と「武士道」という二つの思潮を見て、両者を区別する図式が知られる(相良亨『武士の思想』1984など)。すなわち、幕藩体制のもとで事実上大きな合戦が消滅したことを受け、戦闘者であることより、むしろ為政者であることに武士の存在価値を見て、儒学的な道德観念を取り込んだ「士道」と、そうした時流に抗い、戦国以来の戦闘体験や、主従の心情的な一体感に根ざしたありようを求めた「武士道」とを、対比的に捉える理解である。『葉隠』の口述者である山本常朝は、天下泰平が実現した江戸時代前期にあって、合戦で生死を共にした戦国期以前の主従関係を理想とし、もはや合戦を想定し得ない平時の奉公においても、この理想を保持すべきことを説いた。ここから、上記の図式において『葉隠』は、後者の代表格として位置づけられてきた。

しかし近年、こうした二項対立的な思想史理解は、見直されつつある。『葉隠』についても、主君のため迷いなく死へ突入すべし、という過激な要求がある一方で、為政者集団に属する一奉公人としての、抑制的な身の処し方が説かれてもいることを、無視してはならない(小池喜明『葉隠』1999など)。『葉隠』が説く 忠誠 において、戦闘者として保持すべき激しい理想と、為政者としての主君を補佐し続ける日常的な現実は、不可分に結合している。その全体像を解明することは、「士道」「武士道」の区別を越えた、近世武士の倫理思想全体がもつ特質を探るために必須の課題である。本研究の目的は、まずもってこの課題に取り組むことであった。

(2) さらに本研究は、『葉隠』を直接の手がかりとして探究された近世日本における武士の倫理思想がもつ特質を、同時代の、また武士のみを担い手としない、様々な思想文化にも通じるものとして位置づける、という地点を、(予定の研究期間以降の)最終目的として掲げた。

その際、『葉隠』の武士道と他の諸思想をつなぐための視角として本研究が設定したのは、他

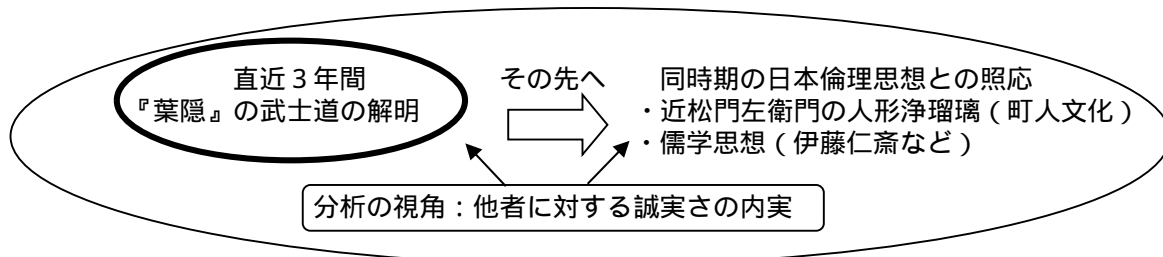
者に対する 誠実 とは何か、という倫理的な問いである。この視角から見たとき、『葉隠』における主君に対する 忠誠 は、たとえば近松の人形浄瑠璃における心中立てや、また儒学思想におけるより広汎な他者に対する誠実さとも、深い次元で通じていることが予想される。当初3年と予定された『葉隠』研究を足がかりとして、さらにその後、近世日本倫理思想全体の特質を 誠実 の内実において浮き彫りにし、その可能性を掘り起こすことを、本研究が最終に目指す目的地、と設定した。

3. 研究の方法

当初予定の研究期間であった3年間で、『葉隠』の思想に対する研究に重きを置くもの、とした。研究にあたっては、1(3)で述べた『新校訂全訳注 葉隠(上・中・下)』(講談社学術文庫)と『底本 葉隠〔全訳注〕(上・中・下)』(ちくま文庫)を、直接の典拠として使用した。

当初の大まかな研究計画は、次のようなものであった。

初年度：上記最新の『葉隠』両版に即した、奉公人の主君に対する忠誠の分析
次年度：『葉隠』および武士道全般をめぐる先行研究の知見との突き合わせ
最終年度：町人文学や儒学思想における誠実さとの比較 / 研究成果の公表



この中で、講談社学術文庫版『葉隠』の執筆をともにした研究者、さらにちくま文庫版『葉隠』に携わった研究者とも、直接知見を交換する場をもつことを計画していた。

4. 研究成果

(1) 前述した「2. 研究の目的」の(1)に直接対応する成果として、2本の学術論文を発表した。それぞれの概要を以下に示す。

・栗原剛「『葉隠』における覚悟と実践」
(『山口大学哲学研究』第29巻、2022年、pp. 1-16)

『葉隠』の武士道において、有事の「武篇」と平時の「奉公」とは、いかにして統一されるか。「武篇」における死の覚悟と実践を一つに貫く「無分別」なありようを、「奉公」にもあてはめることは、果たして可能か。両者の矛盾は、まずもって実践の側にある。「武篇」と「奉公」の実践は、「死」「生」という基調の色合いにおいて、また時間的な長さや質において、大きく異なるからである。

この矛盾は「奉公」の内部において、主君のために死する覚悟が、逆に長きにわたる生の実践を疵なきものにする、という齟齬をもたらすかに見える。しかし「奉公」における死の覚悟は、主君から浪人切腹を命ぜられるのが今日でも将来でもあり得る、という意味で、実はこれも、時間的に大きな振幅をもつ。また「奉公」における実践は、どれだけ長く継続されようとも、理念的には戦闘の果てに死する、という道徳性を意味した。「奉公」における覚悟と実践の間に齟齬はなく、さらにその全体は、「武篇」における理想的な戦闘のあり方と通底する。「武篇」と「奉公」の違いは、「戦闘」がもつ時間的な射程とその質のみにあった。

しかし、まさにその時間的な射程の長さゆえ、平時の「奉公」における武勇の実践は、有事の「武篇」にない矛盾をなお、内に抱えている。「奉公」の実践は、入念な事前の準備と事後の反省とを、不可欠な前提とする。当座の働きは、両者に挟まれてはじめて継続され、磨かれもしたのである。すぐれて反省的で持続的な吟味と、それを「無分別」に棄て去り、超越した地点ではじめて立ち現れる当座の実践は、いかにしてつながるのか。この点をさらに追究することが、今後の課題である。

・栗原剛「『葉隠』における忠誠の倫理 諫言の理想に即して」
(『山口大学哲学研究』第31巻、2024年、pp. 1-20)

山本常朝は『葉隠』において、「奉公之至極之忠節」は「主ニ諫言して国家を治る事」である、と述べた。奉公人の主君に対する究極の「忠節」は、なぜ「諫言」だったのか。常朝が求めた「諫言」のあるべきあり方に着眼することにより、『葉隠』における忠誠の倫理の内実に向ることが、本稿の目的である。

常朝の説く理想の諫言は、第三者に主君の欠点を知らせないための「潜（ひそか）」なものであるべきだったと同時に、当の主君にもそれが「諫言」であると顕わに意識させない、「和の道、熟談」によるべきものだった。そこには、主君のありようを是非ともその本来的な姿へと導き正す、という強い目的意識に貫かれながらも、それを凌駕するほどの信念をもって、様々な欠点を抜きがたく抱えた現前の主君にどこまでも「御味方」しようとする姿勢が、認められる。他方、これに對置されるのは、諫言の客観的妥当性を憚らずに振りかざすことで、結果的には主君の悪名とひきかえに我が身の「忠節」ぶりを示すことにしかならない、広い意味における「理詰」の諫言である。そこにひそむ、現前の主君を置き去りにした我意や慢心を、常朝は深く嫌悪した。

つまるところ、諫言において示されるべき、奉公人の究極的な忠誠には、徹底した自己否定・自己消却の姿勢が求められた。それは、当の働かけを結果的にあえなく咎められ、切腹という形で命ぜられる、肉体的な「死」に対する覚悟としても、貫かれたものだと言える。ところが『葉隠』には、一見してそれとは鋭く矛盾する、鍋島という無二の「御家」「国家」を己れ一人で支えるのだという「大高慢」を、奉公の根底に求める教えもあった。

「奉公之至極之忠節」たる諫言において、両者はいかにして接合されたのか。これは決して新しい問いではないが、『葉隠』に即して、また同時代の諸思想との比較や連関において、今後も追究されるべき課題である。なぜならそれは最終的に、自分にとってかけがえないこの他者に対する真の忠誠、あるいは誠実さがどうあるべきかという、人としての倫理を衝く問いに、連なっていくはずの探究だからである。

(2) 研究成果を総括するにあたり、まず報告すべきことは、当初の計画から1年の期間延長がなされたことである。原因としては、長引くコロナ禍にあって研究環境の確保に支障が生じたことによるものだが、支障の具体的な内実としては、代表者本人の研究が遅延を余儀なくされたことに加え、当初予定していた、国内の『葉隠』研究者諸氏との知見の交換（研究会の開催、およびそれに参加するための出張）が、ついに実現しなかったことを挙げる。これにより、研究、および予算執行の計画は相応の変更を迫られた。ともあれ、期間の延長を許されたおかげをもって、個人的な研究に関しては、一定の成果を出すことが出来た。他の研究者との連絡や、各人の知見を交換したり共同発表したりする場所・方法については、本研究終了後も、継続して模索していくつもりである。

(3) なお、上に概要を記した2本の論文に加え、「2. 研究の目的」の(2)に記した、武士の思想という枠をこえた同時代の諸思想との連関、という大きな目的に対応する成果として、近世萩藩における儒学思想に即した論考も、この期間内に発表する機会を得た。『山口県史』（通史編・近世）における分担執筆がそれにあっており、具体的には、萩藩の藩校（明倫館）で学頭をつとめた山縣周南が、同藩の武士たちに向けて儒学の意義を説いた著作、『為学初問』の思想内容を紹介する一節を、執筆・発表したものである。周南は荻生徂徠の高弟として知られており、その思想・学問は基本的に徂徠学を受け継いだものであるが、同時にそこには、伊藤仁斎からの独自の影響を垣間見ることが出来る。また『為学初問』には、戦国期までの武士の倫理と、同時代の儒学が求める道徳との差異および接点についても論及があり、本研究課題にとって示唆の大きい対象であることがわかった。

(4) 『葉隠』に即した研究目的(2(1))について上述の成果を得ることができ、当時の武士の忠誠に関わる葛藤、およびその死と生を貫く目的意識を、より広く人間にとって自他に対する誠実とは何か、という問題として認識するところにまでは至ったものの、やはりそれを越えた最終的な目的(2(2))に向けて、この期間内に得られた成果はきわめて限定的なものであった。道のりは遠いが、今回の成果を礎としたさらなる研究の中で、答えを模索していきたいと考えている。

以上

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 栗原剛	4. 巻 第二十九巻
2. 論文標題 『葉隠』における覚悟と実践	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『山口大学哲学研究』	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 栗原剛	4. 巻 第三十一巻
2. 論文標題 『葉隠』における忠誠の倫理 諫言の理想に即して	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『山口大学哲学研究』	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 田中誠二、川村博忠、河本福美、森下徹、山本洋、山崎一郎、宮崎勝美、木部和昭、石川敦彦、脇正典、栗原剛、尾崎千佳、上野大輔、荏開津通彦、石崎泰之、山田稔	4. 発行年 2022年
2. 出版社 山口県	5. 総ページ数 1082
3. 書名 山口県史 通史編 近世	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------